

平成三十年度 大妻中野中学校

第三回アドバンスト入試 問題用紙

(二月二日午後)

# 国語

座 席 番 号
番

受 験 番 号
番
氏 名

## 受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて10ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認してください。
- (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を記入してください。座席番号と受験番号は算用数字で記入してください。
- (四) 試験時間は五十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、作問の都合上、本文には一部省略されている部分があります。

地球はまわる。ゆっくりと、しかし、休むことなくまわりつづける。

北半球にとつては四十六億と何万回目の冬、はるか太古の昔からくり返してきた冬である。それにくらべれば、いま地上に繁殖はんしよくしている人間はたかだか十萬回の冬しか知らない。地球が生きてきた長さを二十四時間とすれば、人類はわずか一・八七八秒生きただけなのだ。

人の一生？

八十才まで生きたとしても〇・〇〇一五秒。

「ふん」

と、薄茶色の雲のかたまりが鼻を鳴らした。まるでゴミ、①小さすぎて見えない埃みたいなものじゃないか、と言いたげなそぶりだった。

酸性雨とは、工場や自動車が大気中にまき散らす硫酸化物や窒素酸化物と化合して強い酸性になった雨のことである。地上に酸性雨が降りそぐと、金属製の煙突や窓枠などは錆びてぼろぼろになり、森や野原の植物も枯れてしまう。

人間は車の排気ガスや工場の排煙を迷惑がるが、しかし、酸性雨に言わせれば、それこそ栄養であり、好物なのだ。それがなければ酸性雨はただの雨——どこにでも降る。A 雨になってしまふ。森や街路樹をうるおし、生命をはぐくみ、やがて小川や大河となって海にそそぐだけの平凡で、無個性で、退屈な雨。もちろん酸性雨はそんなものになりたくなかった。

(ふん)と、酸性雨は雲の真似をして鼻から息を洩らした。②役に立つ雨になるなんて、まっぴらごめん。やりたいやつがやればいい。おれはほかの雨とはちがう。おれは美しいものにあこがれる。美なんかなんの役にも立たないだつて？ふふん。言いたいやつには言わせておけ。おれはこの世にふたつとない美を、おれ自身の手で作りたいのだ)

だからこそ、酸性雨は雲の誘いに乗ったのだつた。雲は、旅に出よう、と酸性雨を誘った。

「そんなに美しいものにあこがれるなら、いっしょに旅に出ようじゃないか。おまえにとつちや、たしかにスカンジナビア半島は生まれ故郷だし、居心地もいだろうが、地球はでかいぜ。このごろ人間どもはいたるところで工場を動かし、車をすつ飛ばしている。③おまえの好物はどこでっけて噴き出し、どんな大気のなかにも浮かんでいる。飢え死にする心配はない。おまえが言う、その美だつて意外なところで出くわすかもしれないか。旅は楽しいぜ。おれは雲だから、あつちこつち a しているだけで面白いんだが、道連れがいればもつと楽しいだろう」

こうして酸性雨は雲のあいだにもぐり込んで旅に出たのだつたが、何日もしないうちに後悔しはじめた。心のなかでは、だまされたのかもしれない、と恨んでもいた。雲の言うことは調子がいいばかりで、さつぱりあてにならなかつたからだ。

たとえば雲は、旧共産主義圏の東ヨーロッパやバルカン半島に行けば、おんぼろ工場が吐き出す煙を吸い放題だと言っていたのに、行ってみたら、

たしかに排ガスも排煙もいっぱいあったけれど、そこに爆弾やら地雷やら銃やら硝煙の匂いと、おまけに血の匂いまで混じっていて、とても吸い込めたものではなかった。地上の人間どもが、民族がちがう、歴史がちがう、宗教がちがう、経済が不平等だといがみ合い、すさまじい殺し合いをしていたせいだった。

酸性雨は、こんなのはまずくて吸い込めない、と文句を言ったが、雲は、ペルシヤ湾岸に降りていけば、人間どもがろくに敵の姿も見当たらない砂漠のどまんなかで戦争をおっぱじめ、原油の採掘や精製の施設を破壊しあっているので刺激的な炎が燃えているはず、と取り合わなかった。

雲はなにごとく樂觀的に考える性格なのだった。

しかし、いざペルシヤ湾岸の砂漠地帯に降りていってみると、戦争は終わっていて、たしかにいろんな施設や戦車が黒焦げになり、海に流れ出した。原油のなかでは海鳥たちがもがいていたものの、どこにも炎は見えなかった。ひと気のない砂漠では、消火作業も簡単じゃなかった。しかもどの国も石油関係の施設を失っていたので、不景気に見舞われ、静まり返っていた。

だいいち、酸性雨は砂漠が苦手だった。炎暑も炎暑、雨滴が地上に落ちるはるか手前で蒸発してしまうくらいだから、酸性雨自身、ずいぶんやせ細ってしまった。

——そして、酸性雨は世界一の街の上空へとやってくる——

赤茶けた地面に張りついた、無数のかさぶたのような街だ。そのいたるところに貧弱な煙突が立ち、昼となく夜となく、白い煙、灰色の煙、黄色い煙、緑色の煙、茶色の煙、まっ黒な煙を吐き出している。秩序で、やみくもに工業化が進んでいる証拠だった。クモ

の巣のようにてんでにのびた道路はそこらじゅうで渋滞し、どの車、どのオートバイ、どのトラックももうもうと排気ガスを吹き上げている。

街全体をおおう大気が黄色味を帯び、すべてがぼんやりしていた。ビルも工場も家々も土気色にそまり、遠くの急峻な山々の森もところどころではげ、あちこちで立ち枯れしていた。

(ここだ、ここだ)

酸性雨は鼻をうごめかし、身をよじった。

硫黄や窒素の酸化物のなつかしい匂いがどつと入ってくる。つんとくる刺激的な香り、焼け焦げたような香ばしい匂い、鉄や銅をなめたときの、ひんやりと刺してくる味、錆の生臭さと土埃のいがらっぽさ。すべてが真新しく、新鮮だった。

酸性雨はこれらすべてが混じり合い、溶け出し、浸透し合い、ひとつになった濃厚な味と香りを舌で楽しみ、胸の奥いっぱい吸い込み、胃の底まで流し込んだ。香りと味は全身にしみわたり、やがて雨滴のひとつひとつがふくらんで、つやつやと輝きながら丸くなっていく。かぞえきれない雨、無数の酸性雨だった。

(ああ、これこそ生命の源、生命の喜びというものだ。生き返ったようだ。いやいや、生まれ変わったと言うべきだろうか。それとも、そうだ、新しい生命の誕生と呼ぶことこそふさわしい。おれの生命、おれの歓喜、おれの永遠……)

酸性雨は泣いた。静かに、そのうちに④だれはばかることなく大声で泣いた。涙はとめどもなく流れ落ち、千六百万人の都会を濡らした。雲が、**C**、と呼びかけたのはそのときだった。シベリア寒気団に乗って太平洋に出、そこからうまいことジェット気流に相乗りして世界最大の工業国のあるアメリカ大陸に渡ろう、というのが雲のもくろみだったのだ。

「ちえっ」と、酸性雨は舌打ちした。「旅に出て以来、やっと好物にめぐり会えたというのに、雲のやつ、どうしてそんなに急がせるんだよ」「何をぶつぶつ言ってる。見なよ。かわいい子がいるぜ。うまいものを食うだけでは満足しない、美こそおれの求めるものだ、と言ったのはだれだったかね」

酸性雨は息を飲んだ。背筋に一瞬熱いものが走り、ぞくぞくつと震えた。

それは気高く、美しい姿だった。伏目がちの清楚な顔。やわらかい肩の線。豊かな胸と腰の下に、すらりとのびた脚。昔、森と湖の故郷で出会ったオーロラよりずっときれいだったし、※<sup>2</sup> 髪を青緑色に輝かせたあの少女たちすらおよばない美しさだった。

(美だ！あれこそ、おれが求めていた美しさだ！)

酸性雨は叫びたい気持ちをおさえ、雲に言った。

「急いでくれ」

「一目惚れ、かね」

と、雲が冷やかした。

「おい、酸性雨。ちよ、ちよつと待てよ。冬はまだ長い。雪煙のひとつやふたつ、どこでだつて見つかるじゃないか」

「雲よ、あんたは美というものがわかっていない。雪煙ならなんだつていい、というわけじゃない。みにくい雪煙もあれば、月並みな雪煙もある。美しいといつても、厚化粧もいれば、ただ媚を売っているだけの美しさもある。ほんとうの美というやつは、**X** **ただ**それを見る者をはつとさせ、生きている喜びを感ぜさせる、そういうものなんだよ」

「そういうものかね。だつたら、おまえ、あの雪煙に会う前に、ちつたあ身だしなみを整えたらどうかね。いくらなんでも北半球じゅうの汚い物質を吸い込んで、ぶんぶん匂うその格好じゃ、あのお姫様は振り向いてもくれないぜ。せめて悪臭だけでも日本海の荒波で洗い流していったらどうか」

「あんたにはわからんだろう」と、酸性雨は言い返した。「おれの好物は、そりゃ、確かにおまえさんから見れば汚い煙だが、そいつを食って作り出しているのは、この世にふたつとない、完璧な美だ。おれにしか作れない完全な美なんだ」

嘘ではなかった。酸性雨は真実を語っていた。酸性雨が通ったあとの森や林や野原では、葉の一枚一枚が火ぶくれしたように腫れ上がり、縮み、黒ずみ、やがて落ちていった。そのあとで木々の枝も幹も灰色に変色した。立ったまま死んだ樹木は、あるときは音を立てて倒れ、またあるときは膝を屈して崩れ落ち、土に還った。酸性雨がしみ込んだ土中にはアリやカブトムシも、また一切の微生物も生き残っていなかったから、土は四十六億と数十年前と同じ、純粋な鉱物となった。

酸性雨が流れ込んだ湖では、魚もカエルもザリガニも死んだ。蚊も藻も微生物も死に絶えたから、湖水を濁らせるすべてのものがいなくなり、四

十六億と数万年前と同じように千メートルの遠さまで透き通った。磨き上げたクリスタルガラスのようにどこまでも透明な世界、それこそ酸性雨が  
いう完璧な美の世界だった。

酸性雨は言った。

「みにくく、汚く、危険で、残酷なものから、もともきれいで、美しいものが生まれる。そのことを知っている者だけが、美しさを求め、理解し、  
守っていくことができる。そればかりではない。究極の美を作り出すのも、その対極にあるみにくさや残酷さなんだ」

雲は何にも言わなかったが、ずんぐりした頭をめぐらし、遠くの雪煙を見やった。

⑤雲は目で酸性雨に合図した。酸性雨も目で合図を返すと、雲のふところ深くにもぐり込んだ。もうあわてる必要はない。ここまで来れば、日本  
列島まではひとつ飛びだった。

地球はまわりつづけた。ゆっくりと、しかし、休むことなくまわりつづけた。地球が一回転するたびに地軸は少しずつずれていき、太陽との角度  
を変える。すると大地に落ちる影の長さが変わり、海の波の形が変わり、大気の温度が変わり――

そして、季節が変わった。

北半球も南半球も四十六億と数万回目の四季のめぐりに、あと何回かをかさねた。

雲と酸性雨はまだ旅を続けていた。二人の間で雪煙が寝息をもらし、目覚めると、するするとしなやかな体をほどこいて背筋をのぼし、満ち足りた  
ように笑う。二人は傷つきやすい雪煙のために、冬を探して北半球と南半球を幾度となく往復した。せわしない旅だったが、雲も酸性雨も、それか  
ら雪煙も幸福だった。

そして、そのあいだに、三人が通った道筋に沿って、森は少しずつ鉱物に還り、川も湖も透明さをました。地球上のいたるところで、⑥美はひつ  
そりと、おだやかに、一歩一歩着実に、完成に向かっていた。

(吉岡忍『月のナイフ』「旅の仲間」より)

〔注〕

※1 急峻きゅうしゅん

※2 髪を青緑色に……

山・坂などの傾斜が急で、けわしいこと。  
かつて酸性雨の影響で水道管が変質してしまい、その水道管を通った水で洗った金髪が青緑色に変色したことがあった。  
それを酸性雨は「美しい」と感じていた。

問一 — 線部①「小さすぎて見えない埃みたいなもの」とは何をたとえて言ったものですか。文中から五字以内で抜き出しなさい。

問二  にふさわしい言葉をア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. ありふれた      イ. ありのままの      ウ. ありったけの      エ. ありし日の      オ. ありていな

問三 — 線部②「役に立つ雨」とはどのような雨のことか。本文中の言葉を使って二〇字程度で説明しなさい。

問四 — 線部③「おまえの好物」とは具体的にどんなものか。これより前の文から十五字以内で抜き出しなさい。

問五   にふさわしい言葉を選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア. ふうふう      イ. もくもく      ウ. だろだろ      エ. ばんばん      オ. ぼちぼち

問六  「秩序」とやりたい放題が同じような意味の言葉になるように、 に漢字一字をあてはめなさい。

問七 — 部④「だれはばかることなく」の意味として最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 誰に対してもわからないまま      イ. 誰の邪魔もしないように  
ウ. 誰にでも手当たり次第に      エ. 誰に遠慮することもなく

問八  について、次の問いに答えなさい。

(1)  にあてはまる雲の呼びかけを、前後の言葉から考えて五字以内で答えなさい。

(2) (1)を考えた際、参考としたのは、本文のどのような表現ですか。本文中の表現を引用し、簡潔に説明しなさい。

問九 **X** にあてはめるときふさわしいのはどれですか。最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 自分の美しさを知っていて、見せつけてくるものなんだ。

イ. 自分の美を磨こうと、必死の努力を続けるものなんだ。

ウ. 自分が美しいことさえ知らず、誇りもしないんだ。

エ. 自分の美が月並みでも、構わずうったえかけてくるんだ。

問十 ……線部の文章に見受けられる表現上の効果を一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 植物や土を人間のように描くことで、酸性雨が与えたダメージの大きさを強調する効果

イ. 色をあらわす言葉をたくさん用いることで、読む人の想像力をより強くかき立てる効果

ウ. 読点を多用することで、自然が減びていくスピードの速さをわかりやすく伝える効果

エ. 葉↓枝↓木全体、と読者の視点を移すことで、森が受けた被害の詳細を実感させる効果

問十一 ———線部⑤「雲は目で……返すと」の表現と同じような意味になる四字熟語を一つ選び、漢字に直して解答欄らんに書きなさい。

ア. イクドウオン      イ. イシンデンシン      ウ. イカドウブン      エ. イツシヨクソクハツ

問十二 ———線部⑥「美は……向かっていた」とは地球がこの先どうなっていくのだと考えられますか。これまでの文をふまえ、文中の言葉を用いながら五〇字以内で説明しなさい。

□ 二 次の各問いに答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 次の①～⑤において、条件に合う漢字をア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 送りがないを除いた訓読みの「読みがな」が漢字一字につき四文字以上ある漢字  
ア. 試み イ. 承る ウ. 省みる エ. 留める
- ② 送りがないによつて「読みがな」の文字数が増えたり減ったりする漢字  
ア. 混 イ. 転 ウ. 開 エ. 通
- ③ 音読みでも訓読みでも熟語として成立する組み合わせ  
ア. 上十辺 イ. 中十部 ウ. 右十耳 エ. 下十校
- ④ 「十二支」に含まれない動物  
ア. 酉(とり) イ. 子(ねずみ) ウ. 卯(うさぎ) エ. 甲(かめ)
- ⑤ 部首を除いても、漢字として成りたつ文字  
ア. 腸 イ. 腹 ウ. 背 エ. 脳

問二 線部の漢字の読みをひらがなで解答欄に書きなさい。

- ① 古くからの日本家屋は木造である。
- ② 元氣よく産声を上げる赤ちゃん。
- ③ 目測を誤つたため、計画が狂つた。
- ④ 天然の羊毛で編み上げたセーター。
- ⑤ 戸外にはさわやかな風が吹いていた。



B ことわざ・慣用句に関する問題

問三 次に挙げることわざは、日本と海外とで使われる意味合いが異なったり、後から新しい解釈が生まれたりして二通り以上の意味合いを持つことになったことわざです。二通りの「意味」をもとに、ことわざの□にあてはまる言葉を、漢字を使ってあてはめなさい。

① □から目薬

(意味ア) 物事がなかなかうまくいかなくてもどかしい様子

(意味イ) 回りくどい上に、効果も大して見込めないこと

② □は人のためならず

(意味ア) 人のことを思って何かしてあげると、めぐりめぐっていずれ自分に良い報いが来る

(意味イ) 人に対してあれこれ世話を焼くのは、結果として相手のためにならないので良くない

③ 転□ 苔を生ぜず (転がる□に苔は生えない)

(意味ア) 世の中の動きに合わせ、軽々しく立場を変える人は結局成功しないものだ

(意味イ) 世の中の動きに合わせ、臨機応変に立場を変えられる人は柔軟じゅうなんで古くさくならない

④ 犬も歩けば□に当たる

(意味ア) 進んで何かをしていれば、思いがけない幸運に出会うことがある

(意味イ) 必要もないのに出しゃばって行動を起こすとかえって災難に会う

⑤ ※しやう将を射んと欲ほつすればまず□を射よ

(意味ア) 何かの目的を達成しようとするなら、まずそこに影響する周辺から手を着けなさい

(意味イ) 命をあつさり奪うのではなく、周辺にダメージを与えるだけにして命は助けるべきだ

〔注〕※ 将 軍隊を統率する長。

C 言葉づかいに関する問題

問四 ①～⑤にそれぞれ提示された条件に合う文はア・イのどちらか、ふさわしい方を選んで記号で答えなさい。

① 中野さんは欲しがっている。

ア. 日頃は甘いものを控えている中野さんさえチョコレートをも所望した。

イ. 日頃は甘いものを控えている中野さんもチョコレートを遠慮した。

② 中野さんは誰もがリーダーに推す人物だ。

ア. 今回の選挙、中野さんにこそ立候補して欲しいと全員が思った。

イ. 今回の選挙、中野さんにまで立候補して欲しいと全員が思った。

③ 中野さんは、何か不足していると感じている。

ア. 中野さんがよくよく確かめると、部屋の中に財布があった。

イ. 中野さんがよくよく確かめると、部屋の中に財布はあった。

④ 東京都民の中野さんには、カナダ旅行の経験がない。

ア. 中野さんはタイまでしか行ったことがない、と語ってくれた。

イ. 中野さんはタイだけには行ったことがない、と語ってくれた。

⑤ 中野さんは器械体操が好きだ。

ア. 手本を見せてやる、と言うばかりで中野さんは鉄棒に近づこうともしない。

イ. 手本を見せてやる、と言うばかりか中野さんは鉄棒から離れようとしな



